

談

dan



亜門さん舞台上で学び 百貨店で接客目覚め

愛と浄化の歌を歌いたい ③

豊岡厚恵さん

とよおか・あつえ

シャンソン歌手



花博でパフォーマンスレディーとして舞台上に立った豊岡厚恵さん（平成2年撮影）

——機械メーカーに就職したんです
豊岡 電話の応対力があるから生産性が上がったって、会社では喜んでくれました。「ここにこ笑って陽気に」です。ところが3年半ほどたったある日、宝塚歌劇にいらっしやっった先輩が声をかけてき

てくれたんです。「パフォーマンスレディーのオーディションを受けませんか」って。大阪の鶴見緑地で始まる「国際花と緑の博覧会」で日本ガス協会が出展したシネラビリンスガスパビリオンの舞台上に立つんです。1990（平成2）年ですよ、確か。先輩が声

をかけてくれていなかったら…。

——ええっ！つまりそのお誘いに乗ったんですね？ ようやくOLとして落ち着いたというのに

豊岡 何かを表現したり演じたりということが好きだったのかもしれない。会社ではボーナスも結構もらっていたというのに、オーディションを受けて合格したら、「このままでいいの？」って血が騒いで。で、花博へ行っちゃいました。そこで出会ったのが若かりし演出家の宮本亜門さん。

——それは貴重ですごい出会いですね。今や大御所のひとりです

豊岡 当時はまだ私たちが「あもんちゃん」なんて呼ぶくらい身近で。でもその演出は、お客をいかにワクワクドキドキさせる舞台パフォーマンスができるか、という真剣な思いがすごく伝わってきた。やりがいのある舞台でした。つらいこともたくさんありましたが、お客さまに喜んでもらうことが何より楽しくって、だからこそ大きなやりがいや学びがあったと思います。本当に貴重な半年でした。

——そこから改めて芸能の道へ入っていった

豊岡 それからはアナウンサーの学校に入り、また一から勉強です。そしてテレビやラジオのCM、ナレーション、披露宴やイベントの司会などをしていましたが、20代のころは食べていけない時代が数年あったので、さまざまアルバイトも経験させてもらいました。

中でも大阪の某有名百貨店の催事コーナーではなぜか誰よりも売り上げがありましたので、ここでも大変重宝がられていました。「今日も売り上げ上げるぞ」なんて思ったことは一度もなく、「絶対に目の前のお客さまに笑顔で帰っていただく！」、ということだけを思って売り場に立っていました。そうしたら、いつしか「行列のできる販売員さん」とうれしいネーミングまでつけていただきました。

——そこなんです。接客とかマナーに目覚めたのは。演劇やアナウンサーではなかなか得られない経験があったと思います

豊岡 そつです。この接客販売の仕事はいかに喜んで帰っていただくか、ダイレクトにお客さまの言葉や表情が感じ取れます。実は披露宴の司会も「もてなし」が凝縮された仕事です。今の接客研修の原点にもなったほど、女性として、また人として多くを学べた仕事でした。

聞き手 藤浦淳